

CSCL Research Winter Meeting 2000 : 情報化の中の教師たち

1.About reflection in Teacher Education

～秋田喜代美「教師教育における『省察』概念の展開」～

rep. IMAI,Ako

はじめに

今までの教師教育は、科学的理論から導かれた技術と原理知識の習得に焦点があてられていた(「技術者訓練」モデル)。しかし、「省察」という概念によって教師教育は教師の自律的な思考様式を育てる「専門家開発、自己成長」モデルへと変革していった。この「reflection」の解釈に関する議論や、この理念に基づく教師教育研究プログラムの開発の方向性は、省察の捉え方によって異なってきた。そこで、この文献では、省察の概念がどのように展開してきているのか、その論点を整理し、これからの教師教育のあり方への視座を考えていくとしている。

□省察の概念

ジョン・デューイ(省察の概念の源!)

「省察」とは、「教師自らの直接経験を重視し、信念や価値、既存の知識について積極的に、持続的に一貫して注意深く考えること、そしてこの熟考のために、即興的行動を一時的に停止して思考すること」である。

デューイの省察の過程： 問題提起 手段 目的分析 その分析の検証

省察に望む時に必要な態度とは；

- ・ open-mindedness : 他へと開かれた心 (知的態度)
- ・ whole-heartedness : その事柄に没頭して打ち込む心 (知的態度)
- ・ responsibility : 実行した結果を真摯にうけとめる責任性 (道徳的態度)

ドナルド・ショーン

彼(ショーン)はデューイの省察には納得できなかった。

「自然科学と日常の実践における探究の方法についての相違点がはっきりしてない！」

ショーン：両者の相違は二つの概念呈示をおこなうことではっきりさせようとした。

- ・ 活動の中の知(knowing-in-action)

暗黙知：行為の中で形成され、暗黙に保持されており、日常活動のパフォーマンスに埋め込まれ、行動によって発現する知。

実践的知識：馴染んだ状況という特定の文脈の中で活動を行う時に、固有に機能する特徴をもつ知。

- ・ 行為における省察(reflection-in-action) 行為についての省察 or 行為後の省察(reflection-on-action)

行為における省察：新しく直面した不確実な問題状況に対処し、状況を変容させるべく、状況との対話をしながら行動していくという考え方

言語の媒介は必ずしも必要としない！

行為後の省察：活動の中で瞬時的に形成した理解の意味を問うことによって、新た

な発見が導かれるという考え方 「フレーム（枠組み）」が重要

省察的な授業とは「**子どもの言動に理を与えること**」だ！

さまざまなつながりの中で授業に意味を与え、構造化していくことによって、問題に対処するという過程を連続的に行いながら授業をおこなうこと（例）熟練教師

バン・マネン

彼はショーンらとは省察の捉え方や教師教育の方向性を異にしている。そして、省察を三つに分類していた。

- ・技術的省察(technical reflection)
ある目的達成の手段としての効率・有効性に関わるものであるが、この目的自身は批判や修正に対しては開かれない。
- ・実践的省察(practical reflection)
手段のみでなく、目標も検証される。個人の文脈重視。
- ・批判的省察(critical reflection)
社会歴史的、政治文化的文脈を考慮して、個人の行為を分析する。 熟考

> 熟考(deliberation)とは...

ショーンの概念の中にはなかったもので、社会改革の運動や平等や正義を実現していく社会的過程として授業実践を捉える水準のこと

グリメット

彼の省察の分類はマネンの分類に似ている

- ・第1の水準：知識所有者が知識を使って行動を導き制御するために省察する
- ・第2の水準：文脈や特定の事象や状況の省察がおこなわれる
- ・第3の水準：自分の用いている知識の性質や機能、使い方について省察する

省察を促す先輩教師との協同過程

ショーン曰く「教育現場での早期からの経験や実践を行う教師と教育実習生との授業に関する話し合いが必要だ！」

キー概念が「**スーパーヴィジョン**」である。

スーパーヴィジョン

実習生の授業に対する省察を支えたり、励ましたりする公式、非公式な一切の活動を指し、一種のコーチングとして位置付けられている。(類語：メンタリング)

この時、先輩教師は次の三つのレベルに配慮しながら、援助し励ましていくことが必要とされる。

- (1)実習生が生徒とどのようにやりとりをしたのか
- (2)そのやりとりを実習生がどのようなものとして捉えているのか
- (3)それを教師としての自分との関係の中でどのように示したり、あるいは示さないでいるのか

実習生はこれによって、いかに省察するのかを、先輩教師が何をいかに語るのかという語り口を通して学んでいく。また同時に、助言者としての教師も実習生としてのやりとりを通して学んでいく。

スーパーヴィジョンにおいて何が必要か？

- ・実習生（初任教师）と指導者の両方が防衛的態度を取り除き、信頼を確立すること
- ・教師としての安定した自己概念を形成しながら、その中で生じてくる様々な感情に眼を向けること
- ・助言を行う側の教師が新任教師（実習生）がもっている経験や見識に眼を向け、そこから助言を出発させること
 - 助言を有効に働かせるためには
 - 両者のこれまでの経験を尊重しあい、焦点を決め、具体的な事実に基づいて問題点を指摘する
 - 両者が共通の言語を共有すること
 - 両者が共に問題と枠組みを共有し探究していくこと

省察を促す教師教育研究の問題と今後の課題

省察プログラムの構成や内容に関して

1. 省察の内容が教授技術や学級経営という問題に限定され、授業の目的やカリキュラム、教材の吟味が見落とされている。
技術的省察の水準のみでなく、批判的水準での省察のためには、カリキュラムや教材の検討という視点を促すプログラムが必要である。
2. 省察が授業や生徒へ焦点があてられ、授業が起こる社会や制度の文脈や学校の社会的条件を無視している。また、学級の歴史性や社会性が見落とされ、制度としての学校、学校における教師の連帯の姿という視点が欠落している。
社会的背景の理解なしには授業が成立しえないことを理解する機会が提供される必要がある。
3. 省察プログラムの多くは、社会的実践としての省察という視点が欠落している。
省察を個人レベルだけではなく、どのような支援システムを学校、教師相互が作り上げていくのかを考えなければならない。
4. プログラムでは実習生に実践を模倣させる援助を行うが、その人自らあるいは他の教師の実践に埋め込まれた理論を無視している。また、省察プログラムの多くは、その対象を実習生または新任期としている。
教師の成長段階に応じた省察プログラムを考えること、ライフコースを考えての長期的プログラムの発想が今後必要である。

省察プログラムの有効性、意味を検証する研究のあり方に関して

1. 事例研究では逸話的引用が多く、その逸話の妥当性が明らかでない。
2. 数量的分析研究では、省察の内容と様式によって思考をカテゴリーに分類し、プログラムの進展にともなう変化は記述しているが、そのカテゴリーの分類基準、数量的に示すことの意味が明らかでなく、時間的变化を追うことができていない。
3. プログラムの有効性は、研究者にとって評価され、省察を行った教師自身にとっての

意味が十分に問われていない **重大な問題**

教師教育に省察プログラムがもたらしたもの

教師を育てる学校と大学との連携、協同性が強く主張されるようになった点

反省的实践家としての自律した教師像をめざす教師教育プログラムは、授業の臨床研究の重要性を明らかにし、教師と研究者相互が自律した専門家として連携しあう場を提供する契機となった

教育学の新たなあり方を呈示する視座を与えている